リバプール大学熱帯医学修士課程　齊藤　信夫

現在、リバプール大学熱帯医学修士課程 Liverpool School of Tropicalmedicine
(LSTM: http://www.liv.ac.uk/lstm/), Masters course(MSc)in Infectious Disease に在籍しています。

自己紹介、動機、入学までの流れ　私は高校時代より、熱帯地域で働きたいと考えていました。2005 年鳥取大学医学部医学科卒業し、独立行政法人長崎医療センター初期研修を修了しました。2007 年熱研内科入局し、大学病院で 1 年間、その後、市中病院で 1 年間呼吸器感染症科医として働き、本格的に熱帯感染症学、臨床研究の仕方を勉強したいと考え、LSTM に入学しました。

LSTM MSc について

LSTM は 1898 年に世界で初めて創設されたもっとも歴史のある熱帯医学校です。様々な熱帯感染症の研究や、PHD, MSc, DTMH のコースがあり、世界各地から学生が訪れ勉強、研究をしています。LSTM の Dr Ronald Ross はマラリアが蚊から媒介することを発見し、1902 年にイギリスで始めてノーベル賞を受賞しました。その他にも多数の有名な研究者を排出し、現在も多数の研究が進められています。（LSTM ホームページより抜粋）

現在私が在籍している Masters Program(MSc)は 1 年間のコースです。MScには疫学、公衆衛生、寄生虫学、熱帯感染症学など 8 コースが存在します。私は臨床医向けの熱帯感染症学 Tropical and Infectious Diseases(MTID)に在籍しています。

MTID では 9 月より3月までは授業形式のコースがあり、その後、4 月より 8 月まではそれぞれの研究プロジェクトを行います。MTID ではほとんどの研究プロジェクトが海外で行われています。9 月から 3 月までは 1.5 カ月１単位（月曜～木曜）で様々なコースを選べます。（臨床感染症学、臨床寄生虫学、小児感染症学、感染症疫学など） 私は臨床感染症学を中心により臨床に近い項目を選びました。それらとは別に金曜日は統計の講義が 9 月～3 月まであります。

感想

現在入学より 1 カ月半が経過しました。正直な感想は“”大変“”です。英語が苦手であったため、入学 2 か月前よりリバプール大学の語学コースに通い、英語の成績はなんとかクリアーしましたが、それでも毎日の英語の授業と discussion などについていくのは大変です。しかし、Major から Minor 疾患まで多くの熱帯感染症を学ぶ日々は興奮の連続です。また、授業が大変ユニークで面白く、どの先生も授業に一切手を抜かず、真剣に教えてくれます。現在は DTM の生徒と一緒のクラスなので 80 人くらいが同じ教室で授業を受けます。8 割くらいがイギリス出身の医師で、その半分くらいは途上国経験者です。その他にはアフリア、ヨーロッパ、アジアなどから学生が来ています。

とてもユニークであると感じたのは、一つの疾患を学ぶときに、一つの授業ではなく、多方面からの各種専門の講義が分かれてあります。例えばその日のテーマがマラリアであったら、寄生虫基礎医学の講義（マラリア原虫に関して）、昆虫学の講義（ハマダラ蚊に関してとその対策）、成人臨床、小児臨床の講義、実習（血液塗沫標本、蚊の見分け方など）が続けて行われます。マラリアなど Major 疾患は 4 日間くらいかけて行います。集中して行われ、多方面から一つの疾患を同時にみていくやり方は大変新鮮でした。その中でも特に臨床の講義が面白いです。実際に多くの臨床経験、臨床研究を持つ講師陣がわかりやすく教えてくれます。

テストが既に 2 回行われ、今後あと 2 回筆記のテストが行われます。それとは別に 2 つの小論文提出を 12 月までに行わないといけません。小論文に関してはそれぞれ担当教官が振り分けられるのですが、驚いたことに大変有名な教授 Dr Bertie Squire(President of The International Union Against Tuberculosis and Lung Disease)が僕の担当教官になってくれました。始めて会うときはすごく緊張しましたが、初めての meeting では論文の方針など読むべき major paper など丁寧に指導してくれました。

金曜日はそれとは別に統計の講義、実習が毎週あります。始めに講義を行い、その後、簡単な練習を行うという感じです。授業は基礎的な事から行ってくれてはいるのですが、日本語でもわからない統計の授業に英語でついていくのは正直きついです。

LSTM は University of Liverpool の一部なので大学の施設（図書館、インターネット、ジムなど）を使用することができます。24 時間開いている図書館など勉強するには不便がありません。また、リバプールは何となく長崎と似ています。歴史があり、港町で、観光で有名（ビートルズ、サッカー）でそれ程大きくないが不便ではない、物価も安く、きれいな街で気に入っています。

まとめ

1 カ月半が経過しましたが、ついていくのが精一杯です。イギリスの生活には何とかなれましたが、英語に苦労しています。入学前、英語の成績が足りなかったため、医局に無理を言い大分前より休ませて頂きました。他の医局などでは考えられないことだとは思いますが、このような事も快く了承していただきました。また、多くの学生が MSc終了後、新なた就職先を探さないといけないなか、また医局に戻ることができるというのは大きいと思います。 研究プロジェクトなどでは今後にもつながるように、有吉先生にアドバイスをして頂きながら進めていっています。

将来的な目標としては、臨床医であり続けながら、臨床研究（結核、HIV、熱帯感染症など）を行っていきたいと思います。イギリスでは海外で臨床研究を行いながら、臨床医として働いている医師が多く存在します。日本では日常の業務が忙しく、なかなか臨床医が臨床研究を海外で行っていくのは難しい状況があると思います。日本は、臨床研究分野では、2002 年まで 12 番目であったものが 2003 年以降は 18 番目とさらに順位を下げているとのことです。（JPMA News Letter No.128）。臨床医として海外で臨床研究の行える熱研内科はイギリスのスタンスと似ており、日本ではほかにはないと思います。

ここで精一杯頑張って、多くのことを学び、今後の糧にできればと考えています。

旧校舎（授業はこちらで行われます）

新校舎（研究など）

（授業風景）

クラスメート達と pub にて